

仙台市文化財調査報告書第82集

仙台市 高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ

昭和 60 年 3 月

仙台市教育委員会
仙 台 市 交 通 局

仙台市 高速鉄道関係遺跡調査概報IV

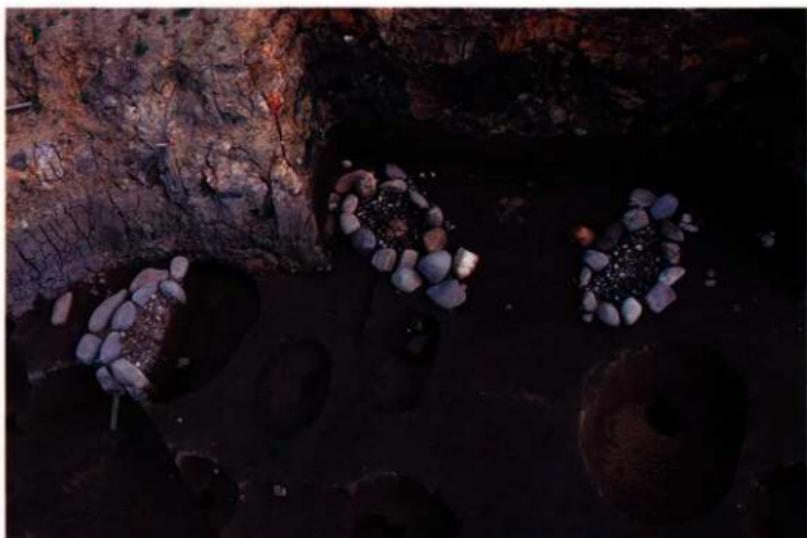
昭和 60 年 3 月

仙台市教育委員会
仙台市交通局



土偶 (右41.4cm、中20.5cm、左上殘存長9.7cm、左下22.7cm)

下ノ内浦遺跡



1号・6～8号配石



1号配石



6号配石



8号配石



7号配石出土耳飾り

富沢水田遺跡



弥生時代の水田跡全景

序

近頃、新しい都市像をめぐって、さまざまな都市論が全国的規模で展開している。都市景観、都市におけるアメニティ、テレトビア、コンベンション都市等々の各論はまさにそれである。これらは、来るべき21世紀をめざした都市づくり政策に関する模索の現われに過ぎない。過去と未来の狭間で生きづいている現代人にとって、人間都市への復権を基調とした「文化とアメニティの再生」の懇願は、まさしく人が永きにわたって生きぬいてきた足跡をもって語る歴史的所産といって過言ではない。

こうした論の中で、文化を語る資源として取り扱う文化財行政の在り方についても、誠心をつくした方策の樹立を考えしなければならないことは論をまつまでもない。

本市に於ける文化財行政も、やっと途についたとはいえ、今後の活気ある発展と更なる展開に期待する所が大である。

とりわけ今回の仙台市高速鉄道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、本年で四年目を迎え、本総数の調査が一応の完了をみたことと、多大の調査成果を得たことは誠に意義深いものがある。これまでの通史的概念を大きく変えなければならない事実の発見が相次いだこともあって、改めてその遺跡がもつ意味の大きさを考えずには置かない調査でもあったといえる。

ここにその概報が公開されるに当り、これに關与された多くの機関や関係各位に対し深く感謝を申し上げる次第である。さらにもまた、この小報文が市民の限りない文化への発掘と、文化財に対する啓蒙、普及の一層の進展に役立つことを切望してやまない。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、仙台市高速鉄道南北線関係遺跡に係る伊古田遺跡・下ノ内遺跡・下ノ内浦遺跡・富沢水田遺跡鳥居原地区における昭和59年度の遺跡発掘調査概報である。
2. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 I ……藤原信彦 II・VI ……斎野裕彦

III ……高橋勝也 IV ……工藤哲司

V ……吉岡恭平

造構トレース 工藤、吉岡、佐藤美智雄、千葉 仁、伊藤 裕、庄子信広

遺物実測・トレース 千葉、伊藤

遺物写真 吉岡、高橋

編集は担当職員が行った。

3. 本書の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原:1970)を使用した。

4. 調査にあたり次の方々の御教示と御助言を賜った。

宮城県教育委員会文化財保護課 東北大文学部考古学研究室

伊東信雄(東北学院大学)、工藤雅樹(宮城学院女子大学)、庄子貞雄(東北大学)、須藤

隆(東北大学)、藤原宏志(宮崎大学)、星川清親(東北大学)、桑月 鮮(東北大学)、佐川
正敏(東北大学)

5. 本書に關係する出土遺物・作成図面・写真は一括して仙台市教育委員会が保管している。

本文目次

序 文	
例 言	
I . 調査経過	1
II . 遺跡の立地	4
III . 伊古田遺跡	5
1 . 遺跡の立地	2 . 調査の方法
3 . 調査の概要	4 . まとめ
IV . 下ノ内遺跡	17
1 . 遺跡の立地	2 . 調査の方法
3 . 調査の概要	
V . 下ノ内浦遺跡	19
1 . 遺跡の立地	2 . 調査の方法
3 . 調査の概要	4 . まとめ
VI . 富沢水田遺跡	55
1 . 遺跡の立地	2 . 層 位
3 . 調査の概要	

挿図・表目次

第1図 調査区位置図	2
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡	3
伊古田遺跡	
第3図 グリッド配置図	6
第4図 I・Ⅲ区全体図	7
第5図 Ⅱ区全体図	8
下ノ内遺跡	
第6図 IV区全体図	18
第7図 IV区6層以下断面図	18
下ノ内浦遺跡	
第8図 グリッド配置図	19
第9図 遺構配置図	21・22
第10図 S 111・12 竪穴遺構	23
第11図 出土遺物(1)	24
第12図 S K 140 土壙	24
第13図 1・6～8号配石遺構	25・26
第14図 S K 24・31・38・87 土壙	29
第15図 出土遺物(2)	30
第16図 出土遺物(3)	31
富沢水田遺跡	
第17図 6層上面落ち込み杭列	56
第18図 第3杭列断面図	56

第19図 調査区位置図	57・58	第21図 12層上面平面図	59
第20図 東壁断面図	57・58	第1表 本調査一覧表	1

写真図版目次

伊古田遺跡					
写真1	I区遺物出土状況	10	写真25	13層配石・土壌群	35
写真2	II区遺物出土状況	10	写真26	13層配石・土壌群	36
写真3	壺出土状況	11	写真27	13層配石・土壌群	36
写真4	遺物出土状況	11	写真28	1・6～8号配石	36
写真5	土偶出土状況	11	写真29	13層配石・土壌群	37
写真6	土偶頸部出土状況	12	写真30	13層配石・土壌群	37
写真7	土偶出土状況	12	写真31	1・6～8号配石下の土壌	37
写真8	土偶出土状況	13	写真32	2～5号配石	38
写真9	鉢出土状況	13	写真33	6・8号配石	38
写真10	壺出土状況	13	写真34	1号配石	38
写真11	II区全景	14	写真35	1号配石	39
写真12	現地説明会	14	写真36	1号配石	39
写真13	出土遺物(1)	15	写真37	1号配石の土壌	39
写真14	出土遺物(2)	16	写真38	1号配石土壌内出土の耳飾り	40
下ノ内遺跡					
写真15	IV区全景	17	写真39	2号配石	40
写真16	IV区西壁断面	18	写真40	2号配石の土壌	40
下ノ内浦遺跡					
写真17	A-10・11区断面	33	写真41	3号配石	41
写真18	S I 10・S II 11整穴造構	33	写真42	3号配石の土壌	41
写真19	S K 140 土壌	33	写真43	4号配石	41
写真20	S K 9 土壌	34	写真44	4号配石の土壌	42
写真21	尖頭器出土状況	34	写真45	5号配石	42
写真22	11層遺物出土状況	34	写真46	5号配石の土壌	42
写真23	12層遺物出土状況	35	写真47	6号配石	43
写真24	13層配石・土壌群	35	写真48	6号配石	43
			写真49	6号配石の土壌	43
			写真50	7号配石	44
			写真51	7号配石	44

写真52	7号配石の土壤	44	写真68	5層全景	50
写真53	7号配石土壤内出土の耳飾り	45	写真69	S I 1住居跡	50
写真54	8号配石	45	写真70	S I 2住居跡	50
写真55	8号配石	45	写真71	S I 3住居跡	51
写真56	8号配石の土壤	46	写真72	S I 4住居跡	51
写真57	8号配石出土の鉢	46	写真73	S I 5住居跡	51
写真58	9号配石	46	写真74	S I 7住居跡	52
写真59	1号壙設土器	47	写真75	S I 10住居跡	52
写真60	2号壙設土器	47	写真76	S I 8住居跡	52
写真61	3号壙設土器	47	写真77	出土遺物(1)	53
写真62	4号壙設土器	48	写真78	出土遺物(2)	54
写真63	5号壙設土器	48	富沢水田遺跡		
写真64	S K 24土壤	48	写真79	東壁断面	57
写真65	S K 31土壤	49	写真80	6層上面落ち込み全景	60
写真66	S K 38土壤	49	写真81	11層上面全景	60
写真67	S K 87土壤	49	写真82	12層上面全景	60

I. 調査経過

仙台市高速鉄道南北線建設に伴う遺跡の発掘調査は、本年度で4年目を迎え、4月11日から調査を開始した。本年度は鍋田工区から泉崎駅工区の本線敷部分の調査を完了することを目標とし、伊古田・下ノ内・下ノ内浦・富沢水田遺跡の4ヶ所を実施した。

伊古田遺跡は、昨年度からの継続調査で、3月末に調査を打ち切った遺物包含層の調査を再開するとともに、今まで使用中の道路部分の調査を行った。遺物包含層の調査では、縄文時代後期中葉のまとまった縄文土器と共に上偶9点が出土した。土偶は41.4cmの大きさのものが出土し、今まで全国で出土している土偶の中でも最大級の大きさである。

下ノ内浦遺跡は、昨年度からの継続調査で、平安時代の堅穴住居跡1軒、縄文時代の河川跡、遺物包含層などの調査を実施し、5月26日に完了した。

下ノ内浦遺跡は、昨年度からの継続調査で、II~IV区の調査を実施した。地表より4m下から、仙台市内では初めて縄文時代早期の押型文土器の包含層、土壌、堅穴遺構などが検出された。また、縄文時代後期前葉の配石造構9基、土壌120基、埋設土器5基が検出され、この時期の墓制を考える上で貴重な発見となった。これらの遺構を復元する遺物包含層があり、縄文土器が平箱で約400箱ほど出土した。その他には奈良・平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、河川跡等が検出された。この遺跡は重層構造の遺跡の中でも、各時代の遺構・遺物が幾層にも重なっている。

富沢水田遺跡では鳥居原地区の鍋田変電所の調査で、昨年度からの継続調査である。弥生時代と平安時代の水田跡が検出された。弥生時代の水田跡は2つの面で検出され、下層の水田跡は1枚の水田の規模が12m²と小区画の水田跡である。

調査を実施するにあたり、仙台市交通局高速鉄道建設本部と我々の協議を行ない、昭和59年11月19日、泉崎駅工区の下ノ内浦遺跡の調査を最後に本年度の調査を終了した。当初目標の本線敷部分の調査は完了し、来年度以降に残った部分は、富沢水田遺跡の鍋田駅出入口等、泉崎駅前側道、「下ノ内・六反田」線の六反田遺跡の3ヶ所となった。

第1表 本調査一覧表

遺跡名 所 在 地	時 代 種 類	調査期間	調査面積	担 当 員	備 考
伊古田遺跡 仙台市大野田字塚田他	縄文・古墳・平安 集落・路	S59.4.11~ S59.8.11	590m ²	篠原信彦・I藤哲司・佐藤美智雄 高橋勝也・千葉仁	
下ノ内浦遺跡 仙台市富沢町丁目他	縄文・平安 集落・路	S59.4.11~ S59.5.26	560m ²	I藤哲司・佐藤美智雄	泉崎駅工区
下ノ内浦遺跡 仙台市富沢町丁目他	縄文・平安 集落・路	S59.4.11~ S59.11.19	1,200m ²	篠原信彦・古賀勢平・主浜光郎 千葉仁・斎野裕彦・高橋勝也	泉崎駅工区
富沢水田遺跡(鳥居原地区) 仙台市長町南二丁目	弥生・平安 水田	S59.4.11~ S59.6.28	750m ²	篠原信彦・斎野裕彦	変電所



第1図 調査区位置図



遺跡番号	遺跡名稱	所屬時期	遺跡番号	遺跡名稱	所屬時期
C-196	伊古田遺跡	縄文(後)、古墳、平安	C-107	戸ノ口遺跡	平安
C-299	下ノ内遺跡	縄文(中・後)、弥生～平安	C-112	大野遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C-300	下ノ内遺跡	縄文(早・前・後)、弥生～中世	C-152	御治堅磐入道跡	奈良、平安
C-301	富沢水田遺跡	弥生、奈良、平安、中世	C-153	堀ノ内遺跡	古墳～平安
C-008	裏町古墳	古墳	C-155	阪東遺跡	古墳～平安
C-009	裏町古墳	古墳	C-156	裏町東遺跡	平安
C-014	敷塚古墳	古墳	C-195	富士上ノ台遺跡	奈良、平安
C-015	金沢古墳	古墳	C-197	六反田遺跡	縄文(中・後・晚)、弥生～平安
C-017	金岡八幡古墳	古墳	C-198	袋東遺跡	古墳、奈良、平安
C-031	土手内横穴群	奈良、平安	C-201	富沢清水遺跡	奈良、平安
C-038	玉の塚古墳	古墳	C-203	妙押屋敷遺跡	平安
C-039	草日社古墳	古墳	C-233	山口遺跡	縄文(早～晩)、弥生～中世
C-040	五反田古墳	古墳	C-266	元袋豆遺跡	縄文(後)、奈良、平安
C-043	鳥居塚古墳	古墳	C-427	土手内遺跡	平安
C-046	瓦反田箱式石棺	古墳	C-520	富沢館跡	奈良、平安、中世
C-052	五反田木棺墓	古墳	C-658	元唐古碑跡	中世
C-106	二神塚遺跡	縄文(早・前・中)			

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡

II. 遺跡の立地と環境

仙台市高速鉄道南北線は、七北田を起点とし、七北田丘陵、仙台市街地をのせる段丘群を南下し、広瀬橋付近から宮城野海岸平野へ入り、終点泉崎に至る。今年度の調査は、昨年度に引き続き宮城野海岸平野の中の郡山低地において行なわれた。郡山低地は北東縁を広瀬川、南縁を名取川、北西縁を長町一利府線により画されている。ここには広瀬・名取両河川により形成された自然堤防、後背湿地が見られる。自然堤防は広瀬川右岸、名取川左岸に見られ、名取川左岸には旧荒川が曲流している。また郡山低地の中央には南北に走る自然堤防が見られる。これら自然堤防の背後には後背湿地が広がっている。

調査対象区域は、郡山低地の中でもその西半部である。ここには北半の鳥居原、中谷地、泉崎に広範な後背湿地が広がり、南半の下ノ内、大野田には自然堤防が見られる。調査は、富沢水田遺跡、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、伊古田遺跡で行なわれた。富沢水田遺跡は低地西半部ほぼ中央の後背湿地に立地している。他の3遺跡は自然堤防上に立地しており、ドノ内浦遺跡は旧荒川の左岸に、下ノ内遺跡と伊古田遺跡は右岸に位置する。

この郡山低地西半部及びその周辺は、仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。昭和51～53・59年度に調査された六反田遺跡では、沖積平野においては県内で最も古い縄文時代中期中葉（大木8b式期）の竪穴住居跡や、後期初頭の竪穴住居跡、古墳・奈良・平安時代の竪穴住居跡等が検出されている。また昭和53・56・57年度に調査された山川遺跡では、縄文時代早期後半の遺物、中期・後期の土壙等、弥生時代の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居跡、平安時代・中世の水田跡が検出されており、両遺跡とも重層構造の遺跡である。両遺跡周辺での当該関連調査においても、縄文時代早期から中世までの遺構・遺物が発見されるという同様な成果が得られ、郡山低地西半部には重層構造の遺跡が数多く存在することが判明している。その他には縄文時代の遺跡として三神峯遺跡・大野田遺跡・元袋II遺跡などがある。古墳時代の遺跡は数多く、西多賀周辺には巣町古墳・金洗沢古墳・砂押古墳等が、大野田には鳥居塚古墳・王の壇古墳・春日社古墳・大野田1号・2号古墳等がある。また、富沢水田遺跡の北には金岡八幡古墳が、西北部には教塚古墳がある。中世では新荒川の南に富沢館跡がある。

尚、郡山低地西半部は旧来自然堤防上に集落や畠が営まれ、後背湿地には水田が広がっていたが、近年行なわれた土地区画整理及び高速鉄道建設に伴ない、開発化が急速に進み、その景観は変貌の一途をたどっている。

III. 伊古田遺跡(C-196)

1. 遺跡の立地

伊古田遺跡は、国鉄長町駅から西南西へ約1.6km、仙台市体育館の南に位置し、名取川、及びその支流である旧荒川とによって形成された自然堤防上に立地する。

周辺には、山口遺跡や六反田遺跡、下ノ内遺跡、富沢跡などの縄文時代から中・近世にかけての遺跡が多数存在している。また富沢水田遺跡では最近、弥生時代の水田跡が発見されている。遺跡周辺は、盛土以前には大部分が畠地、一部が水田として利用されていた。標高は12m前後である。なお、今回調査した部分は、大部分が仙台市高速鉄道泉崎駅の駅舎部分に当たる。

2. 調査の方法

今回主に調査を行なったⅢ区は昨年調査したⅠ区のすぐ西側の部分である。調査前までは道路として利用されていた部分であり、グリッドもⅠ区と調査区が接していることから、そのままⅠ区の3m×3mのグリッドを延長する形をとり、その範囲はA～G、26～40に及ぶ。

Ⅱ区は当初、道路の交差点部分にあたり、調査を予定していなかった部分であったが、工事中に駆六住居跡の一部と思われる焼土面が発見され、緊急に調査を実施した箇所である。よって、グリッドを設定する余裕もなく、平板測量で調査を行なった。調査面積は、Ⅱ区、Ⅲ区合わせて、約590m²である。

3. 調査の概要

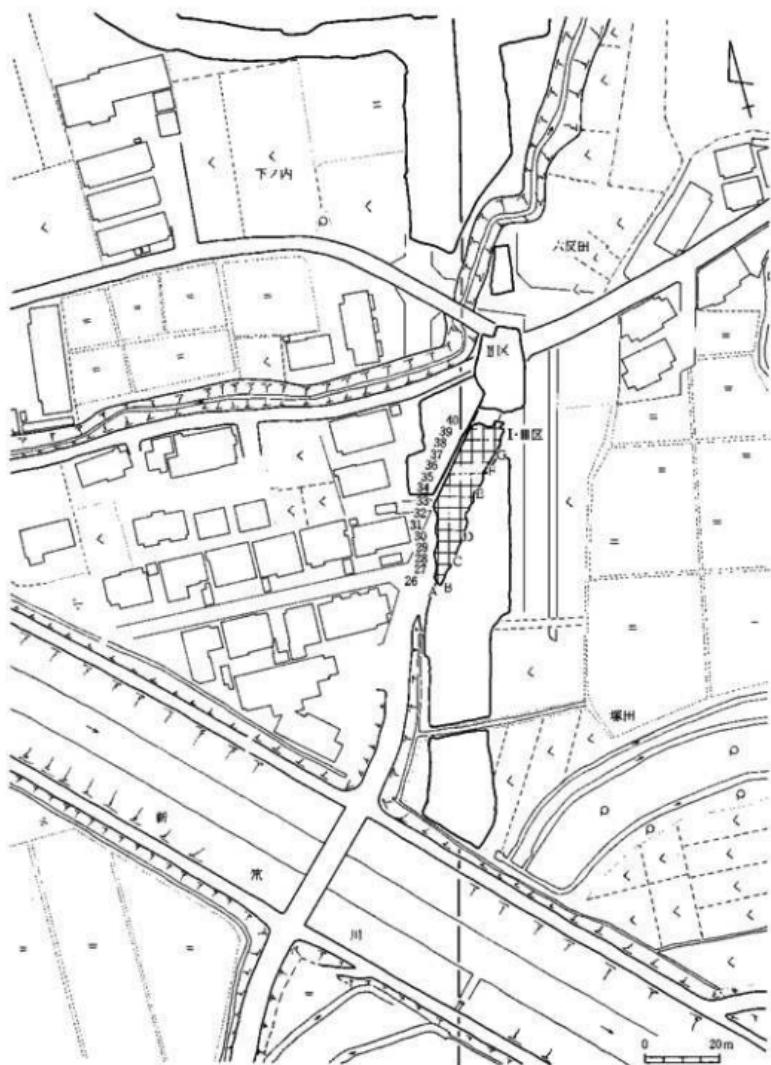
A. 基本層位(第4図)

基本層位は1～8層まで確認された。1・2層は旧耕作土である。3層は暗褐色シルト層であるが、この層の上面で古墳時代前期、奈良時代、平安時代の遺構が検出されている。4層が灰黄褐色のシルト層、5a～5c層が暗褐色のシルト層、6層が黒褐色のシルト層である。この6層が縄文時代後期中葉の遺物包含層にあたる。7・8層が褐色のシルト層であり、8層は7層に比較して若干砂質気味である。

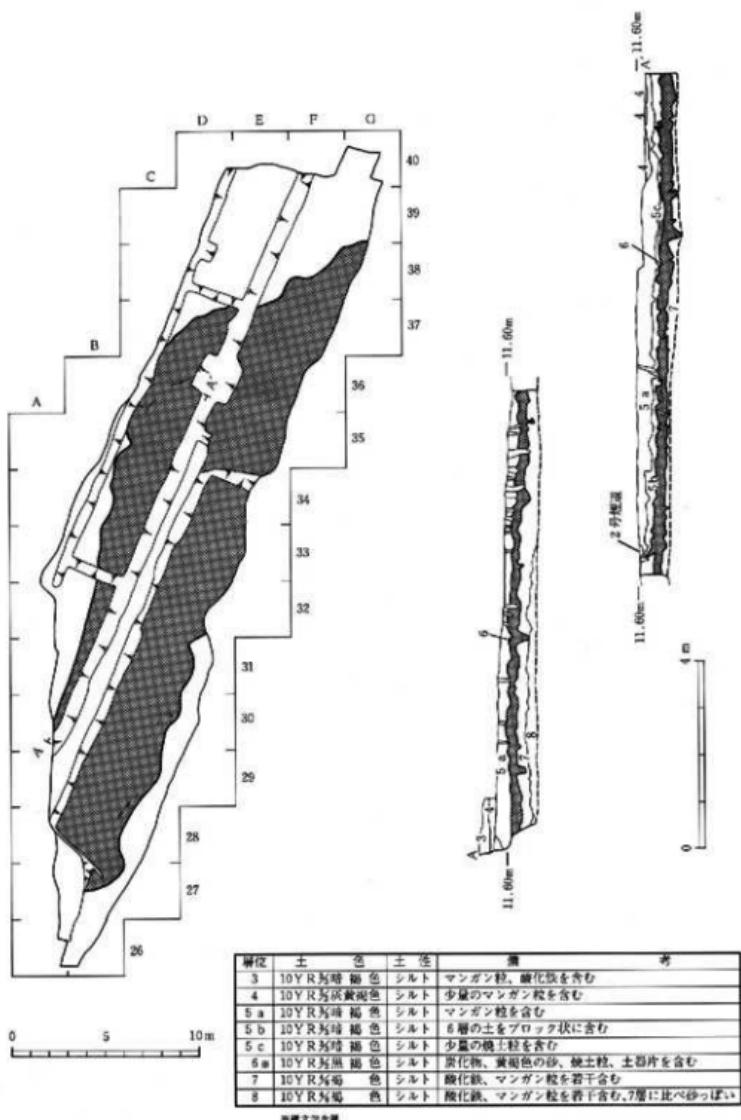
B. 縄文時代後期の遺構と遺物

遺物包含層(第4図、写真2)

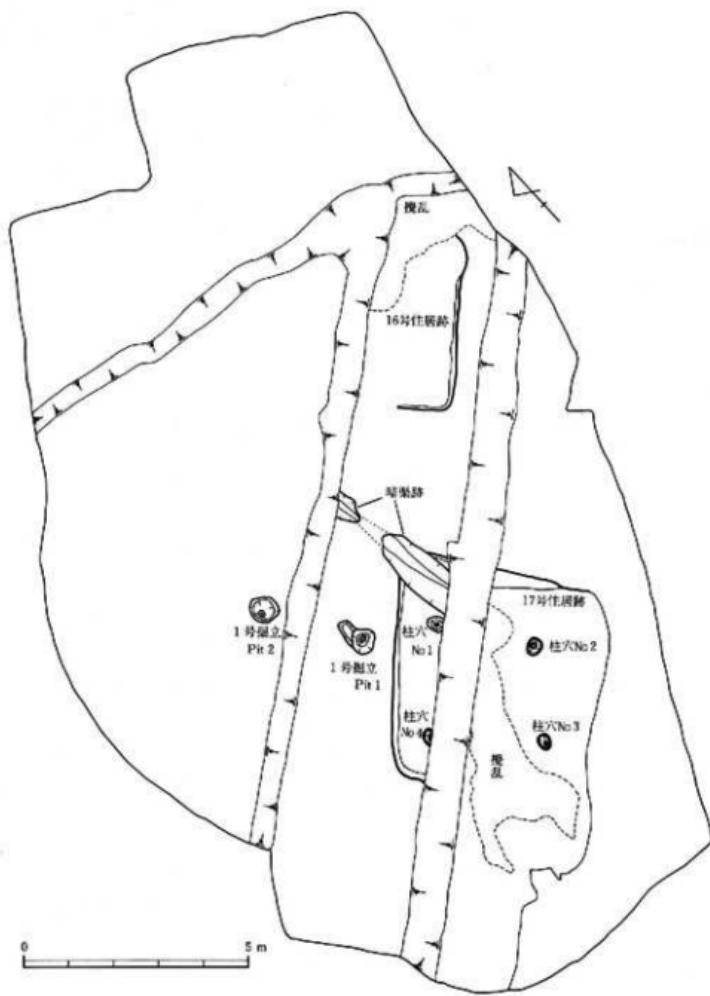
グリッドB～G、27～38の範囲で確認された。層位は基本層位の第6層黒褐色シルト層である。包含層は北東から南西へかけて、細長い楕円状の広がりを見せるが、その中央部と西側を下水道と上水道の攪乱によって破壊されているため、遺存状態は必ずしも良くはない。包含層は平均して20cm前後の厚さで堆積しているが、層の上・下面ともかなりみだれた状態になっている。これは人為的と言うよりも層が堆積する時に自然的な作用によって、このようになった



第3図 グリッド配置図



第4図 I・III区全体図



第5図 II区全体図

ものと思われる。包含層は、薄く段階的に掘り下げたが遺構は検出されなかった。

土器（写真3、4、9、10、13-3～12、14-1～13）

包含層から出土した土器は、破片の点数で5000点を超える量である。しかし現在の段階では、破片の点数に比べ接合により、完形、あるいはそれに近い状態まで復原できる個体の割合は低いようである。

土器の器形は浅鉢から深鉢、壺形土器など多様である。文様のモチーフも浅鉢などで、口縁部付近を平行する沈線で何段かに区画し、その段を下彫する沈線で連結し縄文を施したもの（写真13-7・8・9、14-1・5）や、曲線の沈線で文様を描き、磨消縄文の手法を使ったもの（写真13-12、14-2・10・13）などがある。なお粗製土器もかなりの量が出土している。

平行沈線の文様を持つ土器は、加曾利B型・II式に類例を見ることができるものであり、その他の土器も含めて、縄文時代後期中葉、宝ヶ峯式の時期にあたるものと考えられる。

土偶（写真5、6、7、8、13-1～3）

土偶は今回の調査で、10体分程の破片が出土している。その中で完形に近い状態まで接合できたのは4体である。それらの土偶は、破片も含めてすべて中空のものはなく、ソリッドのものばかりである。中でも写真5の土偶は接合すると体長41.4cmにもなり日本最大級の大きさである。4体のうち3体は立像の形態であり、いずれも顔と頭部を別々に作り出している。写真13-2は顎面に沈線による文様が施されている。写真13-1は、頭部と体部が9cm程はなれて出土している（写真6、7）。接合された3体の立像の土偶は、すべて右足の破片が発見されず、この点も注目すべきポイントかもしれない。

C. 平安時代の遺構と遺物

II区3層上面で、16、17号住居跡、1号掘立柱建物跡が検出された（第5図、写真11）。II区は調査区中央に縦横に埋設管の擾乱が走り、その他の擾乱もあり、かなり遺存状況の悪い調査区である。16号住居跡も床面の一部と若干の壁の立ち上がりを検出できたのみであった。17号住居跡も擾乱によってかなり遺存が悪く、柱穴は検出できたが、床面、壁とも一部しか検出することができなかった。中央の暗渠跡は出土遺物から17号住居跡とあまり時期差のない遺構と考えられる。

4.まとめ

- 伊古川遺跡は、縄文時代後期中葉、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構が存在する遺跡である。
- 縄文時代後期中葉の遺物包含層からは、宝ヶ峯式の遺物が多量にまとまって出土しており、一緒に出土した土偶の中には、体長41.4cmを計る日本最大級のものが存在した。

写真 1 I区遺物出土状況
(縄文後期遺物包含)



写真 2 III区遺物出土状況
(縄文後期遺物包含)



写真3 叠出土状況



写真4 遺物出土状況



写真5 土偶出土状況



写真6 土偶頭部出土状況



写真7 土偶出土状況



写真8 土偶出土状況



写真9 鉢出土状況



写真10 壺出土状況



写真11 II区全景



写真12 現地説明会



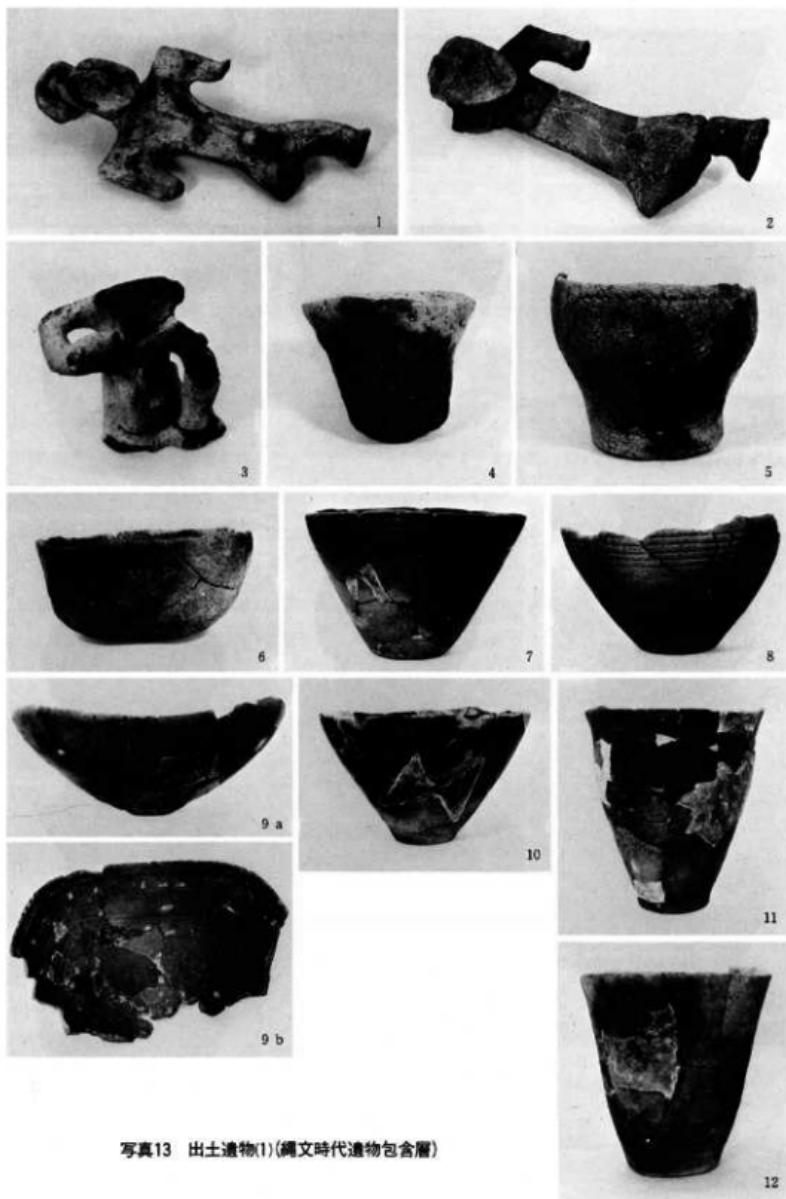


写真13 出土遺物(1)(縄文時代遺物包含層)

12



写真14 出土遺物(2)(縄文時代遺物包含層)

IV. 下ノ内遺跡 (C-299)

1. 遺跡の立地

旧荒川の南岸の標高12m前後の自然堤防上に立地する。南西側は新荒川を境として後背湿地へと移行する。旧荒川の対岸には山口遺跡・下ノ内浦遺跡が接し、南東側では六反田遺跡・伊古田遺跡と接している。

2. 調査の方法

今年度は、前年度に行なったIV区の5層までの調査に引き続き、IV区の6層以下の調査を行なった。調査は前年度同様に3×3mグリッドを基本とし、東西方向にA～G・南北方向に1～14グリッドの地区内約480m²を調査した。

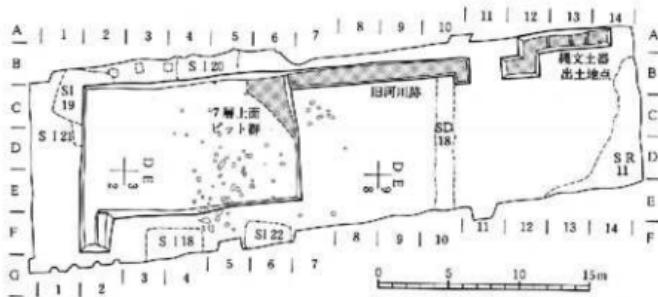
3. 調査の概要

7層上面では、C～F・3～7グリッド内で柱痕跡を検出することのできない円形または梢円形のピットが多数検出された。このピット群の時期は平安時代以前という以外には詳細は不明である。また7層上面の精査によって、調査区北部を斜めに横切る旧河川跡が検出された。この旧河川は、6B層上面まで立ち上がる。川幅は23m以上ある。川の堆積は調査した2mの深さまで大きく4時期ある。

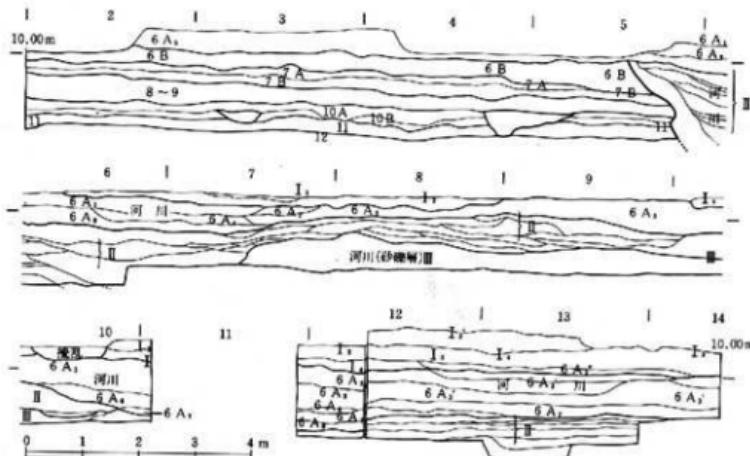
旧河川の発見によって7層以下の調査は、6グリッド以南で実施し、以下12層上面まで調査したが、各層より繩文土器片(中期～後期頃)が数点出土しただけで遺構は検出されなかった。



写真15 IV区全景



第6図 IV区全体図



No.	土色	土性	No.	土色	土性
1r	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土	6A ₁	20YR 4/2 赤褐色	シルト質砂
1z	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土	6A ₂	10YR 4/2 赤褐色	シルト質砂
1z	7.5YR 4/2 赤褐色	粘土質シルト	6A ₃	10YR 4/2 赤褐色	シルト質砂
1r	7.5YR 4/2 赤褐色	粘土質シルト	II	下層 下層	下層
1z	7.5YR 4/2 赤褐色	砂質シルト	III	砂	砂
1r	7.5YR 4/2 赤褐色	砂質シルト	6B	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₁	7.5YR 4/2 赤褐色	粘土質シルト	7A	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₂	10YR 4/2 赤褐色	粘土質シルト	7B	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₃	7.5YR 4/2 赤褐色	砂質シルト	8-9	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₄	10YR 4/2 赤褐色	シルト質砂	10A	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₅	10YR 4/2 赤褐色	シルト質砂	10B	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₆	7.5YR 4/2 赤褐色	粘土質シルト	II	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土
6A ₇	7.5YR 4/2 赤褐色	シルト質砂	12	10YR 4/2 赤褐色	シルト質粘土

第7図 VI区6層以下断面図(西壁)

写真16 IV区西壁断面



V. 下ノ内浦遺跡 (C-300)

1. 遺跡の立地

下ノ内浦遺跡は、国鉄長町駅から西南西へ約1.5km、仙台市体育馆の真東に位置し、名取川、及びその支流である旧荒川とにより形成された自然堤防とその後背湿地とに立地する。周辺には、山口遺跡や六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、泉崎浦遺跡などの縄文時代から中・近世にかけての遺跡が多數存在している。また、富沢水田遺跡では、弥生時代の水田跡が検出されている。遺跡周辺は、盛土以前には大部分が水田、一部畑地として利用されていた。標高は10.3~12.3mで、南の旧荒川側と西侧が高くなっている。

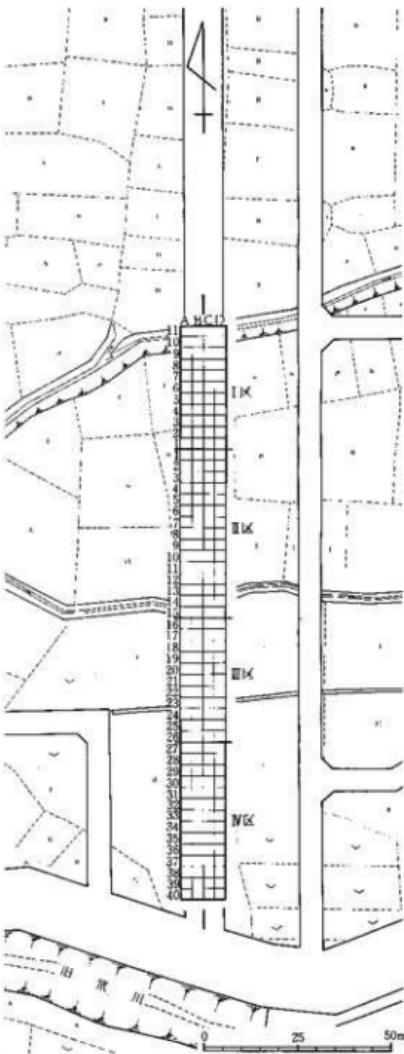
2. 調査の方法

調査区は高速鉄道南北線の起点である七北山から13,569~13,686kmの部分にある。北側からI~IV区とし、3×3mグリッドを設定した。本年度調査箇所はII~IV区である。

3. 調査の概要

A. 基本層位 (第9図4、写真17)

基本層は1~28層まで確認された。^(注1) 1・2層は旧水田耕作土、3~6層は黄褐色系シルト・粘土層、7層は黒褐色系の粘土層、9~12層は黒褐色系のシルト・粘土層、13層以下はグライ化した緑灰色系の粘土質シルト層で、28層が礫層である。5層上面で奈良・平安時代の遺構が検出されている。7層は弥生時代後期の遺物包含層である。11~12層は縄文時代後期の遺物包含層であり、13層上面では後期の遺構が検出されている。15層から縄文時



第8図 グリッド配置図

代前期の遺物が数点出土している。19~22層は縄文時代早期の遺物包含層で、19b~21層で遺構が検出されている。

B. 縄文時代早期の遺構と遺物

19b・20・21層で柱穴遺構2基、土壙7基が検出されている。19a~22層からは早期前葉の押型文土器片や石鏃・スクレイバー・尖頭器などの石器が出土している。

S I 11 柱穴遺構（第10図、写真18） 20層で検出され、AB-34グリッドに位置し、S I 12を切っている。南北2m、東西2m以上の不整長方形を呈し、深さ約20cmを測る。底面は堅くしまっている。柱穴やが跡などではなく、ピットが検出されただけである。堆積土中から押型文土器（第11図2、写真78-2）や剝片・チップなどの石器が出土している。

S I 12 柱穴遺構（第10図、写真18） 20層で検出され、B-33・34グリッドに位置し、S I 11に切られる。南北2.2m、東西2.8mの不整方形を呈し、深さ約15cmを測る。柱穴やが跡などではなく、ピットが検出されただけである。堆積土中から土器片・チップ・剝片などが出土している。

S K 140 土壙（第12図、写真19） 19b層で検出され、AB-15・16グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸1.8m、短軸1.5m、深さ1.3mを測る。断面形は逆台形である。底面中央でピット1基が検出された。堆積土は6層で、遺物は出土していない。SK 140と同様なものとしてSK 9（写真20）、SK 72、SK 60、SK 2、SK 4などが検出されている。

遺物包含層（第11図1・3~5、写真78-1~14） 19a~22層が遺物包含層で土器片125点、石器類435点出土している。土器片のほとんどは小破片である。文様の不明瞭なものが多いが、文様の看取できるものとして押型文と無文の土器片を確認している。第11図は押型文土器片で、1は口縁部片、他は体部片である。1・2・4・5は重層菱形文であり、3は矢羽状あるいは重層菱形文と考えられる。これらは口付式と呼ばれるものである。石器はチップ、剝片、石鏃、尖頭器（写真21）、スクレイバーなどが出土しているが、チップと剝片が多数を占める。

C. 縄文時代後期の遺構と遺物

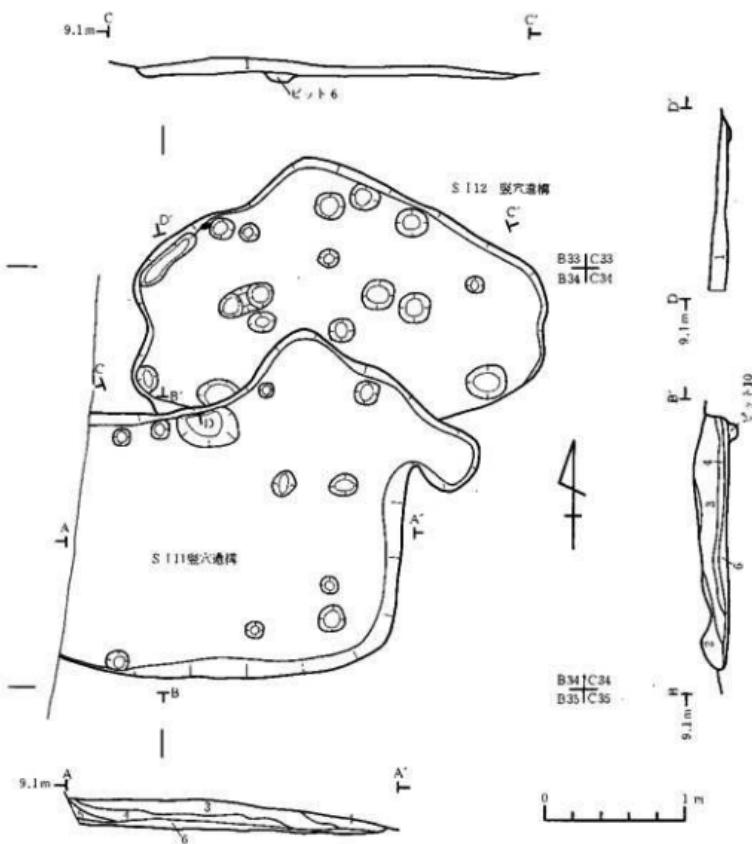
11・12層から後期前葉の遺物が多量に出土し、さらに13層上面で配石遺構9基、土壙約120基、埋設土器5基の遺構が検出された（第9図、写真22~32）。

配石遺構

13層上面で9基検出されている。1・6・7・8号配石（第13図、写真28、33）はDE-22~24グリッドに、2・3・4・5号配石（写真32、39~46）はAB-18~20グリッドに、9号配石（写真58）はB-23・24グリッドに位置する。1・6~8号配石は他に比べ大型である。1・4・6~8号配石は河原石を1~2重に配し、長軸方向を立石とし、内側に小礫をつめこむという構造である。2・3号配石（写真39~42）は西端を立石としている。5号配石（写真



第9図 遺構配置図



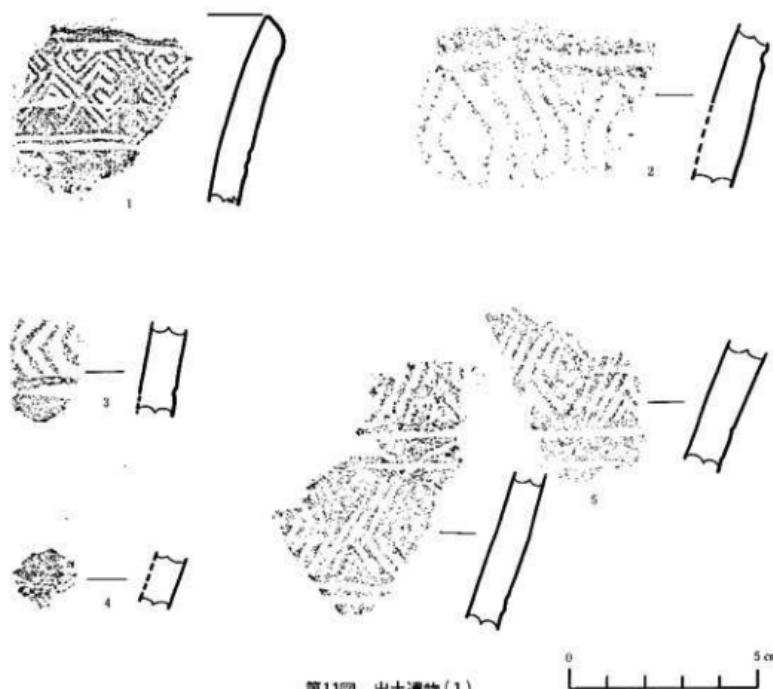
S I 11 土層観察表

層 No	土 色	土 性	備 考
1	10YR 5% 細 細色	シルト	灰青粘土のブロック混入
2	10YR 5% 咸 鹽色	シルト	炭化物を混入
3	10YR 5% に近い 黑褐色	粘土質シルト	
4	10YR 5% 細 細色	粘土質シルト	
5	10YR 5% 砂 細色	シルト質砂土	
6	10YR 5% 細 細色	シルト	
ピット10	10YR 5% 咸 鹽色	粘土質シルト	

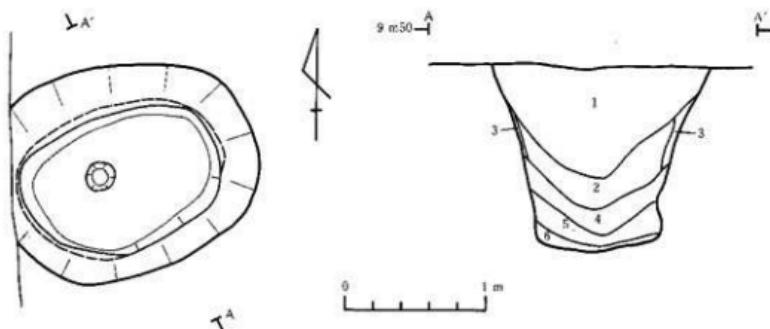
S I 12 土層観察表

層 No	土 色	土 性	備 考
1	5GY 4/2 咸 鹽色	粘土質シルト	
ピット6	2.5Y 5% オリーブ灰色	シルト	

第10図 S I 11・12 豊穴遺構

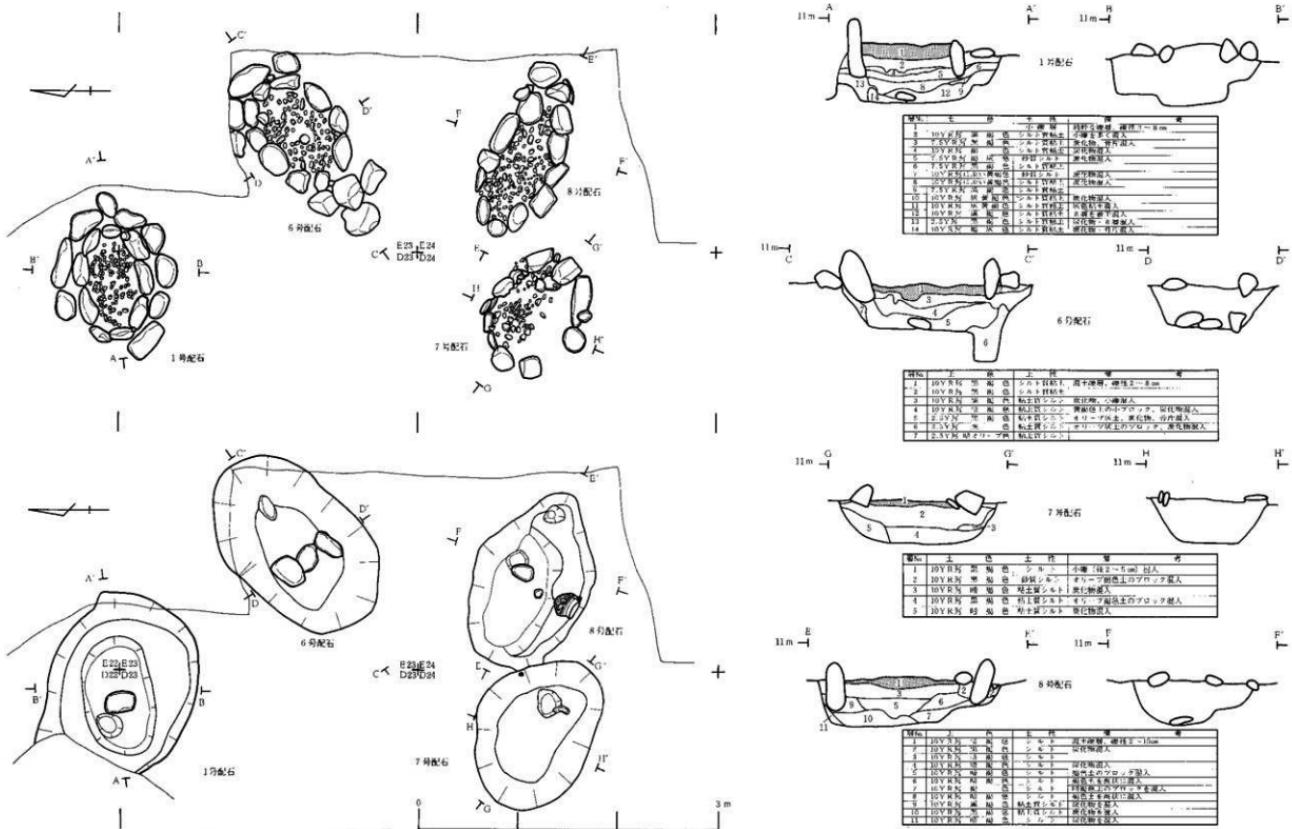


第11図 出土遺物(1)



層番	土色	土性	圖考
1	5GY分暗オリーブ灰色	粘土	未分解の植物遺体混入
2	2.5GY分暗オリーブ灰色	砂質シルト	黒褐色粘土のブロック、未分解の植物遺体混入
3	2.5YR 黄灰色	砂質シルト	未分解の植物遺体混入
4	5GY分 オリーブ灰色	砂質シルト	灰土上のブロック、未分解の植物遺体混入
5	3G灰 緑灰色	シルト質粘土	未分解の植物遺体混入
6	2.5YR 黄灰色	砂質シルト	未分解の植物遺体混入

第12図 SK 140土壤



第13回 1・6・7・8号配石遺構

45・46)は立石がない。9号配石は組石の単位がくずれてしまい集石状を呈しているが、下位から土壙数基が検出されている。

1号配石(第13図、写真34~38) D E-22・23グリッドに位置する。北西の1部分が擾乱により破壊されている。配石の規模は長軸1.8m、短軸1.3mで、その構造は河原石を楕円形に2重に配し、内周の長軸方向の両端の石を立石とし、内側に小礫を厚さ15cmほどつめこむというものである。長軸方向はN-82°-Eである。下部には2段に掘りこまれた土壙が検出されている。その平面形は楕円形で長軸1.7m以上、短軸1.5m、下位の掘りこみ平面形は楕円形で長軸1.2m、短軸0.7mである。深さは約50cmを測る。底面でピットと扁平な礫が検出されている。ピットは径25cm、深さ20cmで、確認面直下から丹塗りの土製耳飾り1点(写真78-18)が出土している。

6号配石(第13図、写真47~49) E 23グリッドに位置する。配石の規模は長軸2.1m、短軸1mである。その構造は河原石を楕円形に配して長軸方向の両端の石を立石とし、さらにその立石の外側に3~4個の石を配し、内側に小礫をつめこむというものである。本末は2重に配石されていた可能性もある。長軸方向はN-54°-Eである。下部の土壙の平面形は楕円形で長軸2m、短軸1.2m、深さ40cmを測る。底面でピットと短軸方向に並ぶ礫3個が検出された。

7号配石(第13図、写真50~53) D 24グリッドに位置する。配石の規模は長軸1.4m、短軸1.1mで、その構造は河原石を楕円形に配し、長軸方向の両端の石を立石としたものである。内側の小礫は他にくらべ少なく、また立石はひとつずつを半割したものである。長軸方向はN-52°-Wである。下部の土壙の平面形は不整楕円形で長軸1.6m、短軸1.2m、深さ45cmを測る。底面でピットが確認され、そのプラン上面にのる状態で土製耳飾りが2点出土している。土製耳飾り(写真78-19・20)は径2cmの丹塗りのものである。

8号配石(第13図、写真54~57) E 24グリッドに位置する。配石の規模は長軸1.7m、短軸0.8mで、その構造は河原石を楕円形に配し、長軸方向の両端の石を立石とし、内側に小礫をつめこんだものである。下部の土壙の平面形は不整楕円形で長軸1.8m、短軸1.2m、深さ50cmを測る。南側にテラス状の段があり、南境式の鉢(第16図2、写真77-17)が出土している。底面の東寄りでピットと扁平な石が検出されている。

土壤群(第9図、写真24~31)

13層上面で検出された土壙は120数基で主に17~25ラインに分布している。土壙の平面形は円形と楕円形とに大別される。規模は径が0.6~1.5m、深さが15~60cmと様々である。各土壙の堆積土中から土器片、土製品、石器が出土しているが、とくにSK43、SK117からは丹塗りの土製耳飾り(写真78-15~17)が出土している。

S K 24土壤(第14図1、写真64) A 19グリッドに位置する。平面形は円形で径1.2m、深

さ70cmを測る。堆積土は8層で、石錐（写真78—25～29）などが出土しているほか、6層から深鉢が一括で出土している。

S K 31土壤（第14図2、写真65） D24・25グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で長軸1.5m、短軸1.3m、深さ50cmを測る。堆積土は11層である。

S K 38土壤（第14図3、写真66） B C—22グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で長軸1.5m、短軸1.3m、深さ60cmを測る。堆積土は17層で、15層から深鉢が一括で出土している。

S K 87土壤（第14図4、写真67） B C—23・24グリッドに位置し、9号配石の下部で検出されている。平面形は楕円形で長軸1.2m、短軸0.7m、深さ40cmを測る。堆積土は12層で、西半部に深鉢が埋設されていた。深鉢（第15図、写真77—16）は器高46.8cm、口径37.8cmと大型で南境式に比定されるものである。

埋設土器遺構（写真59～63）

D11、B16、B19、E20、D24グリッドの13層上面で5基検出されている。

遺物包含層（写真22、23）

11・12層から多量の縄文土器や石器などが出土している。11・12層は調査区のほぼ全域に堆積しているが、A16・B17・C18・D19のグリッドより南側に多量の遺物が分布し、その範囲は土壤群が密に分布する範囲とほぼ一致している。出土した縄文土器は後期前葉の南境式のものがほとんどで、他に土偶、土錐、土製円盤などの上製品や石錐、石錐、石匙などの石器や礫石器などが出土している（第16図1、写真77—18、写真78—15～35）。

D. 奈良・平安時代の遺構と遺物

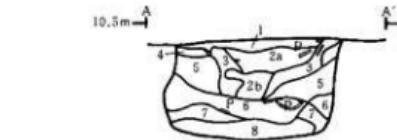
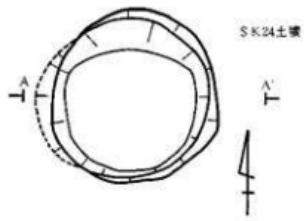
5層上面で奈良時代の住居跡5軒（S I 1～5）、平安時代の住居跡3軒（S I 7・8・10）が検出された（第9図、写真68）。住居跡は13～20ラインに集中している。

S I 1住居跡（写真69） 南北4m、東西4mの隅丸方形で、主軸方向はN—16°—Wである。壁は10～15cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝はほぼ全周し、主柱穴が3つ検出された。国分寺下層式の土師器壺や須恵器壺（写真77—8・9）が出土している。

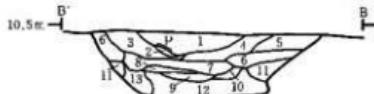
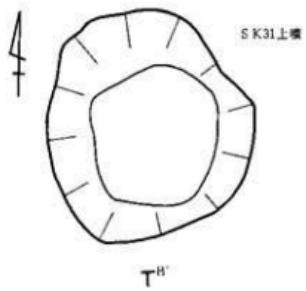
S I 2住居跡（写真70） 南北5.2m、東西5.5mの隅丸方形で、主軸方向はN—11°—Wである。壁は20～25cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝は全周し、主柱穴が5つ検出された。国分寺下層式の土師器壺や須恵器壺（写真77—4・5）が出土している。S I 3を切っている。

S I 3住居跡（写真71） 南北3.8m以上、東西4.2mの隅丸方形で、主軸方向はN—78°—Eである。壁は15～20cm残存し、床面は貼床で、カマドは東壁南寄りにある。周溝・主柱穴は不明である。国分寺下層式の土師器壺（写真77—2・3）が出土している。S I 2に切られる。

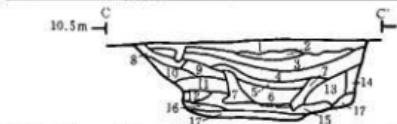
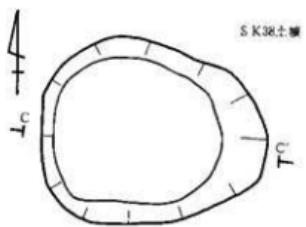
S I 4住居跡（写真72） 南北4.1m、東西4.7mの隅丸方形で、主軸方向はN—16°—Wで



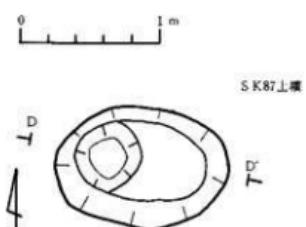
層番	土色	土性	名
1	Y 7V 1 黄褐色	砂質	シルト質粘土
2	Y 7V 1 黄褐色	砂質	シルト質粘土
3	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
4	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
5	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
6	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
7	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
8	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土



層番	土色	土性	名
1	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
2	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
3	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
4	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
5	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
6	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
7	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
8	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
9	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
10	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
11	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
12	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
13	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土



層番	土色	土性	名
1	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
2	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
3	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
4	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
5	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
6	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
7	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
8	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
9	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
10	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
11	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
12	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
13	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
14	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
15	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
16	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
17	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土



層番	土色	土性	名
1	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
2	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
3	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
4	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
5	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
6	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
7	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
8	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
9	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土
10	7 V 7 黄褐色	砂質	シルト質粘土

第14図 SK 24・31・38・87土壤

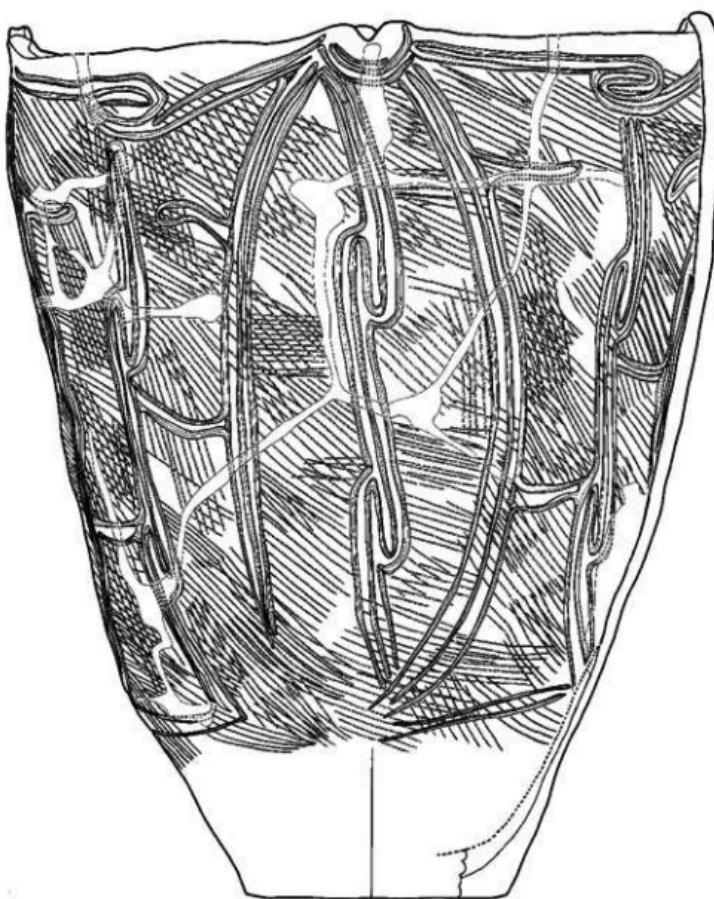


図	遺物・部位	名	口径cm	底径cm	文様の特徴
1	S.K.87土著	深鉢	37.8	46.8	多角沈線、粗状・連續下垂文、無系文R

第15図 出土遺物②(原尺)

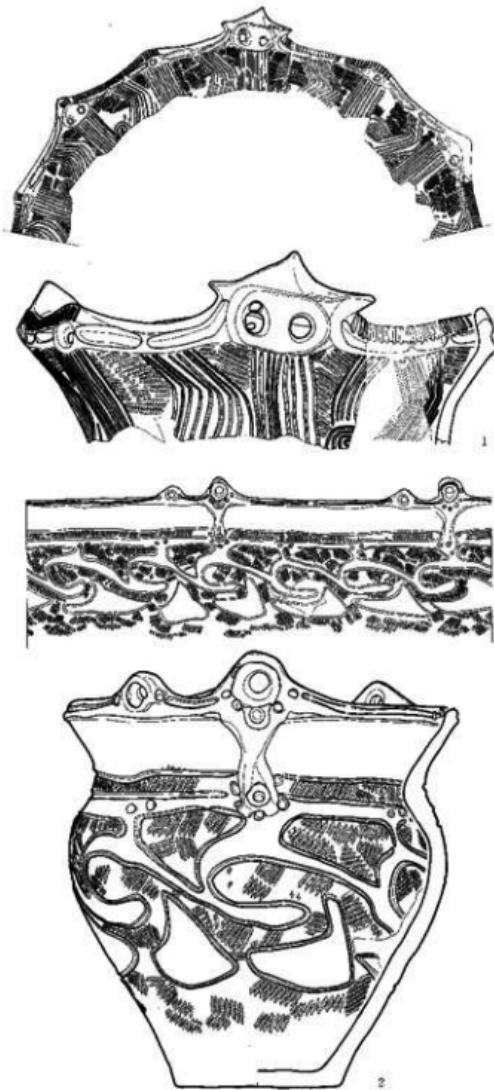


図	遺構・場所	器 形	口径cm	器高cm	文 標 の 特 徴
1	BIIK-12層 床	鉢	24.0	—	多条波線、溝・下垂・弧状文、網文LR.
2	8号配石土壙	鉢	21.2	20.8	入組高文、光環網文しR

第16図 出土遺物(3)(縮尺2分、展開図適宜)

ある。壁は25cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁東寄りにある。周溝は東北隅に一部検出された。主柱穴は不明だが壁柱穴を8つ確認している。国分寺下層式の土師器壺と須恵器壺(写真77-6・7)が出土している。S I 5を切っている。

S I 5住居跡(写真73) 南北5m、東西5mの隅丸方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁は20cm残存し、床面は貼床で、カマドは北壁中央にある。周溝はほぼ全周し、主柱穴は4つである。国分寺下層式の土師器壺、鉢(写真77-1・13)が出土している。S I 4に切られる。

S I 7住居跡(写真74) 南北4.2m、東西4m以上の隅丸方形で、堆定主軸方向N-78°-Wである。遺存状況は悪く東半の床面は削平をうけている。壁は2~6cm残存し、カマドは焼土の分布から東壁南寄りの位置に推定される。主柱穴は3つ確認されている。ロクロ使用の土師器壺・須恵器壺(写真77-11・14)が出土している。S I 8に切られ、S I 10を切っている。

S I 8住居跡(写真76) 南北推定5.4m、東西4mの隅丸方形で、主軸方向N-78°-Wである。壁や床面はほとんど削平されているが、東壁中央にあるカマドと4つの主柱穴は確認されている。ロクロ使用の土師器壺・甌(写真77-12・15)が出土している。S I 5とS I 7を切っている。

S I 10住居跡(写真75) 南北2.7m、東西2.5mの隅丸方形で、主軸方向N-88°-Wである。壁は10~15cm残存し、床面は貼床で、カマドは東壁南寄りにある。周溝・主柱穴は不明である。ロクロ使用の土師器壺(写真77-10)が出土している。S I 7に切られる。

4.まとめ

- 下ノ内浦遺跡は、縄文時代早期前葉・後期前葉、弥生、奈良、平安時代にかけての人間の活動した痕跡が地表下約4mにわたる土層に刻みこまれた遺跡である。
- 縄文時代早期前葉の遺物として押型文土器が確認されている。それらは日計式と呼ばれるものである。
- 縄文時代早期前葉の遺構として、住居跡の可能性も考えられる竪穴遺構2基、所謂階し穴遺構の1類型に類似したものを含む土壙7基が検出された。
- 縄文時代後期前葉の南境式期の遺物が多量にまとまって出土している。
- 縄文時代後期の配石遺構は、下部の土壤のあり方、遺物の出土状況などから墓である可能性が高いと考えられる。同時に確認されている土壤群なども墓制に深く関わる遺構群と考えられる。それらは南境式期に属するものである。
- 弥生時代後期の遺物包含層と畦畔状の遺構が検出されている。
- 奈良時代(国分寺下層式期)、平安時代(表杉ノ入式期)の住居跡が8軒検出されている。

注

注1) 概報Ⅱ(仙教委 1984 第69集)では基本層が20層であるが、本報告が優先する。

注2) 写真78-6は黒曜石製の局部磨製の石鏃である。日計式土器と共作する数少ない例である。

写真17 A-10・11区断面

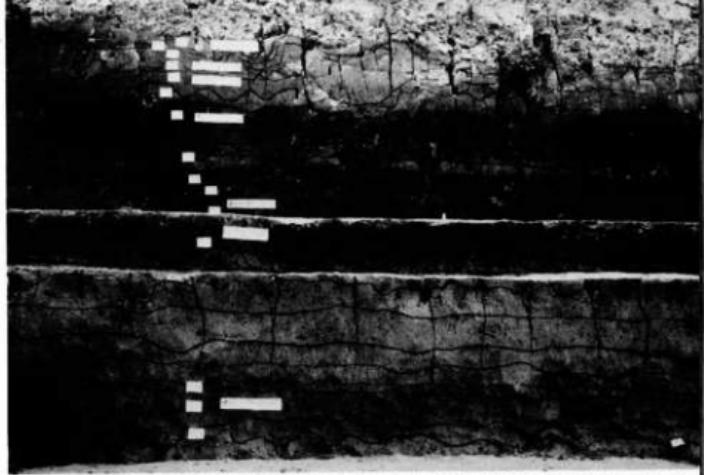


写真18 S I 10・S I 11
竪穴道構



写真19 S K 140土壤



写真20 SK9土壤



写真21 尖頭器出土状況



写真22 11層遺物出土状況



写真23 12層遺物出土状況



写真24 13層配石・土壤群
(南→北)



写真25 13層配石・土壤群
(南→北)



写真26 13層配石・土壤群
(西→東)



写真27 13層配石・土壤群
(東→西)



写真28 1・6～8号配石



写真29 13層配石・土壤
群 (西→東)



写真30 13層配石・土壤
群 (東→西)



写真31 1・6~8号配
石下の土壤



写真32 2～5号配石



写真33 6・8号配石



写真34 1号配石

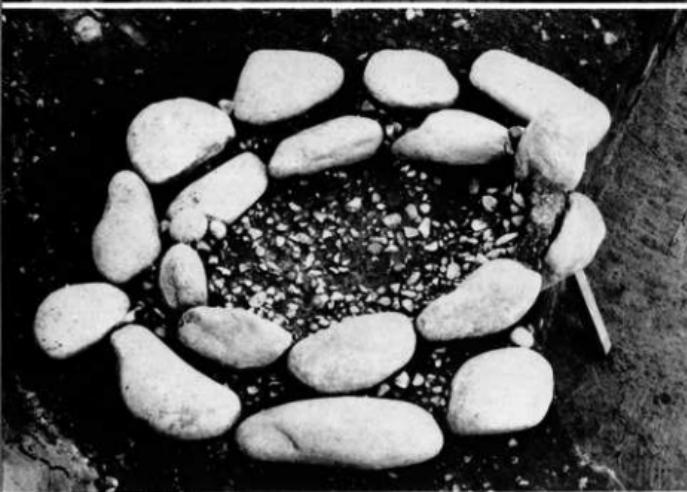


写真35 1号配石



写真36 1号配石



写真37 1号配石の土壤

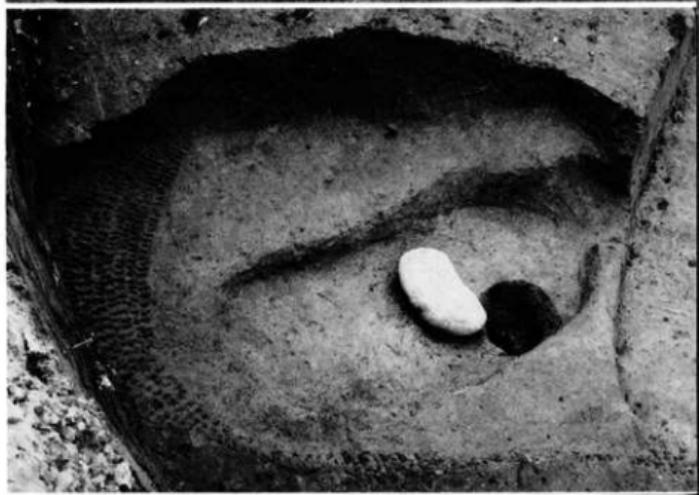


写真38 1号配石の土壤
内出土の耳飾り



写真39 2号配石



写真40 2号配石の土壤

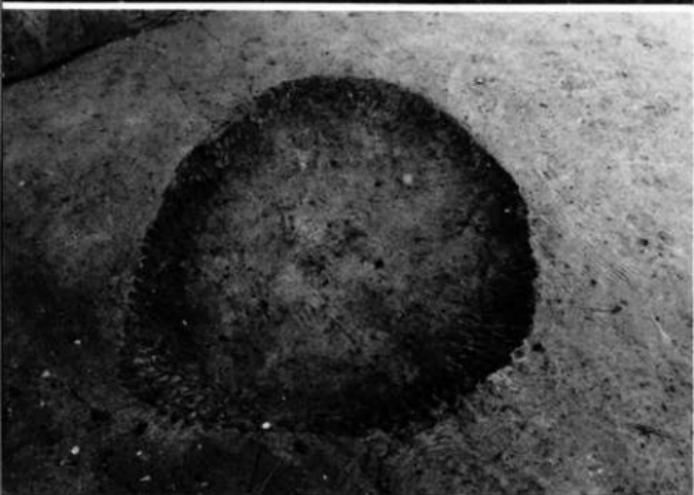


写真41 3号配石



写真42 3号配石の土壤



写真43 4号配石



写真44 4号配石の土壤



写真45 5号配石



写真46 5号配石の土壤



写真47 6号配石



写真48 6号配石



写真49 6号配石の土壤



写真50 7号配石



写真51 7号配石



写真52 7号配石の土壤

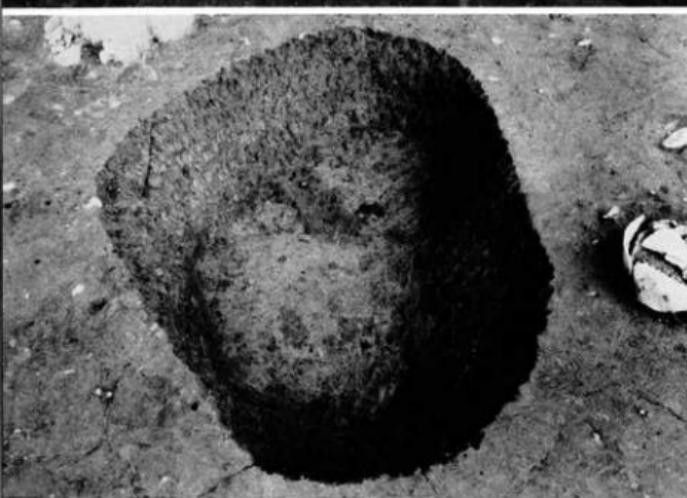


写真53 7号配石の土壤
内出土の耳飾り

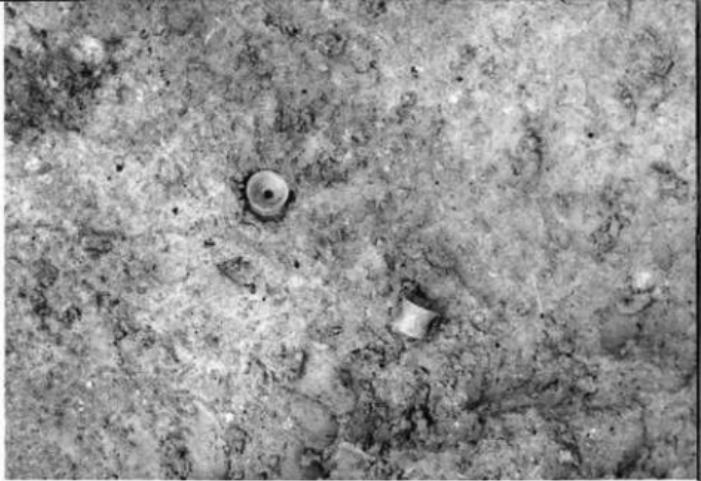


写真54 8号配石



写真55 8号配石



写真56 8号配石の土壤



写真57 8号配石出土の鉢



写真58 9号配石



写真59 1号埋設土器



写真60 2号埋設土器



写真61 3号埋設土器



写真62 4号埋設土器



写真63 5号埋設土器



写真64 SK24土壤



写真65 SK31土壤



写真66 SK38土壤



写真67 SK87土壤



写真68 5層全景
(北→南)



写真69 S I 1住居跡



写真70 S I 2住居跡



写真71 S I 3住居跡



写真72 S I 4住居跡



写真73 S I 5住居跡



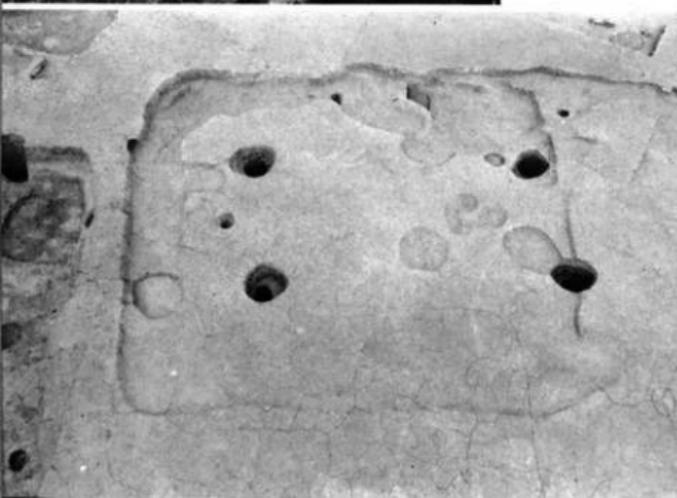
写真74 S I 7住居跡



写真75 S I 10住居跡



写真76 S I 8住居跡





1



2



3



4



5



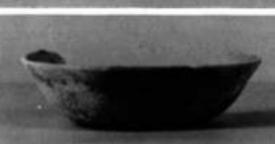
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

1. 13. S I 5住居跡

2. 3. S I 3住居跡

4. 5. S I 2住居跡

6. 7. S I 4住居跡

8. 9. S I 1住居跡

10. S II 10住居跡

11. 14. S I 7住居跡

12. 15. S I 8住居跡

写真77 出土遺物(1)



1. Ⅲ区21層
 2. Ⅳ区S 111
 3. Ⅲ区19 a層
 4. Ⅳ区22層
 5. Ⅱ区19 b層
 6. VI区20層
 7. IV19 a層
 8. Ⅲ区19 b層
 9. Ⅳ区19 a層
 10. Ⅳ区19 b層
 11. Ⅲ区19 b層
 12. Ⅳ区19 b層
 13. Ⅳ区20層
 14. Ⅳ区19 a層

15~16. SK43
 17. SK117
 18. 1号配石
 19~20. 7号配石
 21. SK40
 22. Ⅲ区13 b層
 23. Ⅲ区13層
 24. Ⅲ区11層
 25~29. SK24
 30. Ⅲ区11層
 31. Ⅲ区11層
 32. Ⅲ区12層
 33. Ⅲ区12層
 34. SK27
 35. Ⅲ区13層

写真78 出土遺物②

VI. 富沢水田遺跡 (C-301) 鳥居原地区

1. 遺跡の立地

富沢水田遺跡鳥居原地区は、東北本線長町駅の西方約750mに位置し、主に名取川と広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。調査対象区域は仙台市高速鉄道南北線の鍋田変電所部分であり、面積は670m²である。

2. 層位

基本層位は1層から14層まで細分層を含め17層確認された。1層は旧耕作土、2層シルト層、3～5層は粘土層、6層以下は泥炭層である。

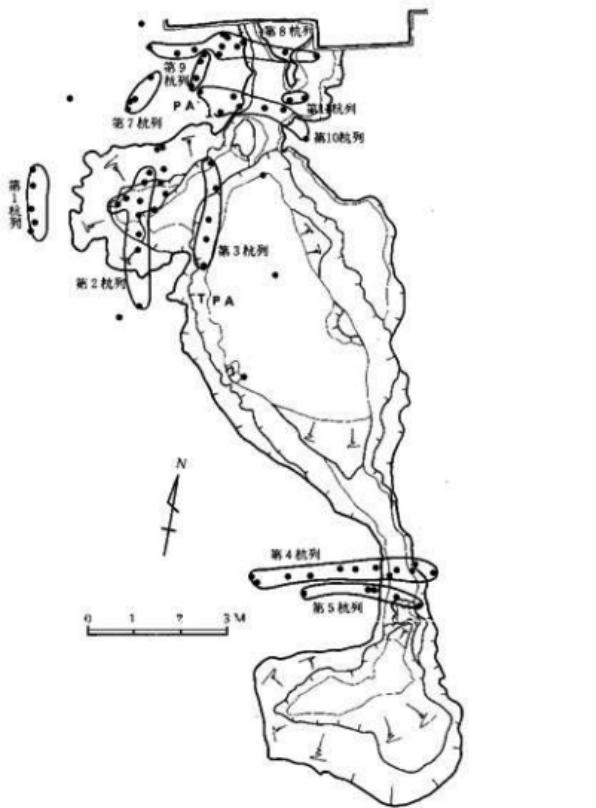
3. 調査の概要

今回の調査では2層、3層、4層、11層、12層の各層上面で水田跡が検出された。また6a層上面からは杭列を伴う落ち込みが検出された。

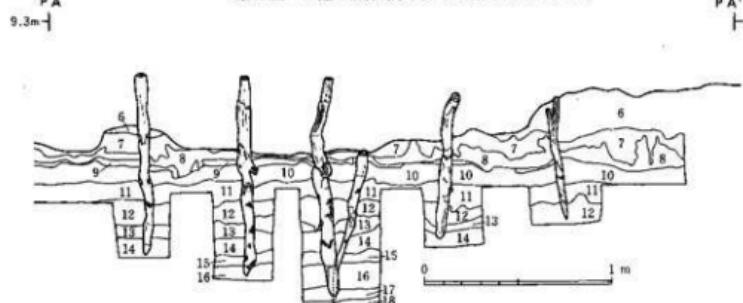
3層上面と4層上面で検出された水田跡は層中に灰白色火山灰を部分的に含み、表杉ノ入式の土師器片を出土することから、平安時代の水田跡である。2時期にわたるこの水田跡は共に明瞭な酸化鉄の集積層が形成されていないことから、湿田に近いものと考えられる。また区画は捉えられなかったが、南北方向の畦畔はほぼ真北方向を向く傾向がある。12層上面の水田跡は泥炭質の粘土層を作土とする湿田である。水田の構造は真北に対し東に約30度、及び西に約60度ふれた方向の大畦を基軸とし、大畦と大畦とに囲まれた中に小畦により水田を作っており、水田の規模は今回の調査では12m²前後である。この水田跡は隣接する高速鉄道南北線長町南駅部分で検出された弥生時代中期の水田跡と層位が対応し、構造も同様であり、同一時期のものである。また、11層上面で検出された水田跡は、畦畔の方向性が12層の水田跡とほぼ同じであり、大畦は12層の大畦を覆った11層の高まりをそのまま使っていることから、12層の水田跡に直接後続する弥生時代の水田跡と考えられる。この11層と12層の2時期の水田跡は、当地区において弥生時代に水田が連続して作られていたことを示しており、水田耕作の定着を物語る。

さて、今回の調査では、弥生時代2時期、平安時代2時期の水田跡が検出されたわけであるが、6b層、7層といった層からも水田跡の検出される可能性がある。特に7層は隣接する長町南駅部分の5層に対応し、花粉分析、プラントオパール分析、土壤分析の結果や、層中から木製農耕具（轍）や石包丁が出土していることなどから水田跡の存在が考えられており、今後の調査により水田跡の時期的な構造が明確になるであろう。また水田耕作の実態についても集落との関係やイネ以外の作物を考慮し、種々の分析及び同定法を活用しながら調査を行なう必要がある。

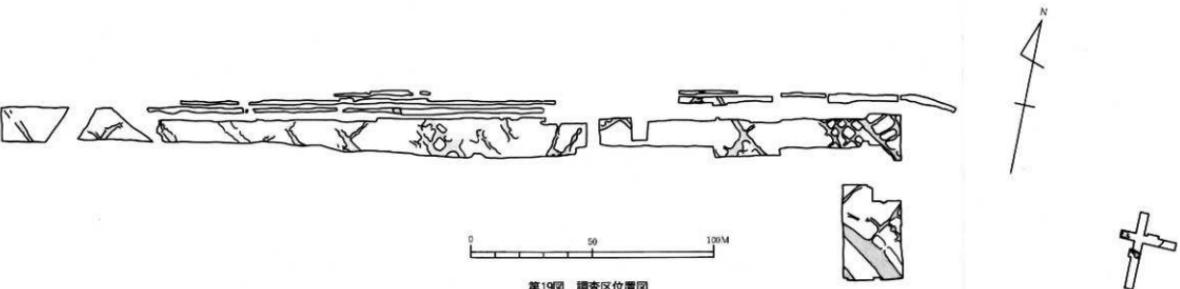
注) 荒井 格 1984 「富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告集第69集



第17図 6層上面杭列を伴なう落ち込み平面図



第18図 第3杭列断面図



土 層 注 記

- 1層: 10Y R 5分褐色シルト。しまりやあり。粘性なし。旧耕作土。
- 2層: 7.5Y R 5分シルト質粘土。しまりなし。粘性あり。最上部には酸化鉄の集積層がみられる。
- 3層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。平安時代水田耕作土。縦に線化鉄斑がみられる。部分的に白灰色火山灰をブロック状に含む。
- 4層: 10Y R 5分灰褐色シルト質粘土。しまりなし。粘性ややあり。平安時代水田耕作土。縦に酸化鉄斑がみられる。部分的に白灰色火山灰をブロック状に含む。
- 5層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。酸化鉄斑がみられる。
- 6a層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。10Y R 5分灰褐色粘土と互層になる。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。
- 6b層: 10Y R 5分暗褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。
- 6c層: 5Y R 5分オリーブ色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。部分的に10Y R 5分黒褐色粘土と互層になる。縦の細かな酸化鉄斑がみられる。
- 7層: 2.5Y R 5分灰褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。酸化鉄斑が部分的にみられる。
- 8層: 7.5Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。5Y R 5分オリーブ色粘土と互層になる。
- 9層: 5Y R 5分灰褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。
- 10層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。10Y R 5分灰褐色粘土と互層になる。
- 11層: 10Y R 5分灰褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。平安時代水田耕作土。
- 12a層: 10Y R 5分褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。部分的に12b層をブロック状に含む。弥生時代水田耕作土。
- 12b層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。2.5Y R 5分灰褐色土と互層になる。この層は大体の下には明瞭に残存するが、他の部分においては多くはみられない。
- 13層: 2.5Y R 5分灰褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。
- 14層: 10Y R 5分黒褐色粘土。しまりなし。粘性あり。泥炭層。

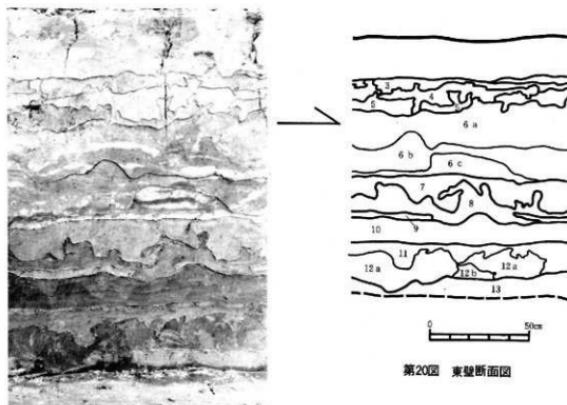
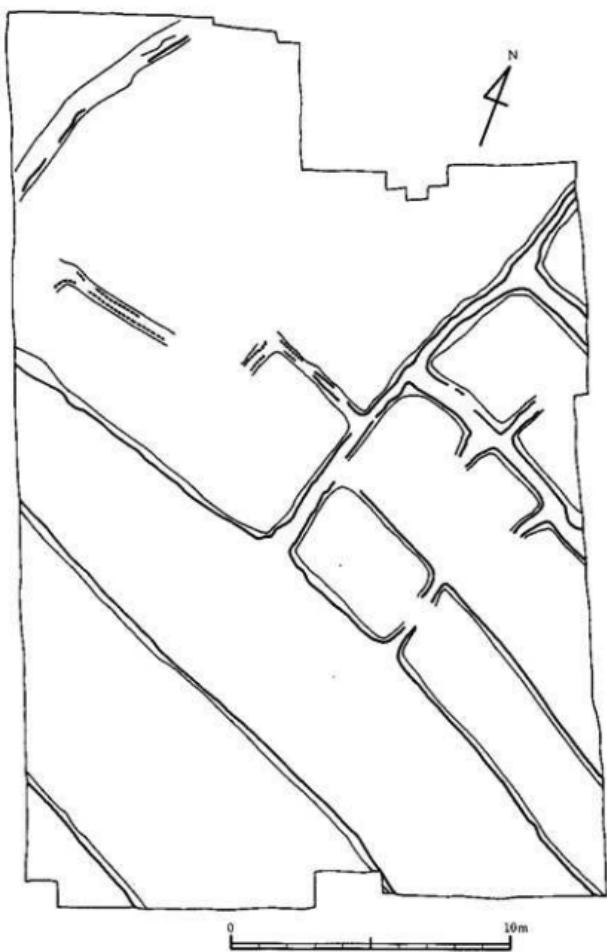


写真79 東壁断面



第21図 12層上面平面図

写真80 6層上面落ち込み
全景



写真81 11層上面全景



写真82 12層上面全景



職 員 錄

社会教育課		文化財調査係			
課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	主事	吉岡恭平
主幹	早坂春一	上事	田中 則和	・	工藤哲司
		・	結城 慎一	・	渡部弘美
文化財管理係		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
係長	佐藤政美	上事	木村 浩二	上事	主浜光朗
主事	岩沢克輔	・	篠原 信彦	・	斎野裕彦
・	山口 宏	教諭	小野寺和幸	・	長島栄一
		・	佐藤美智雄	・	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		・	金森 安孝	・	松本清一
		・	佐藤 甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物紫崖下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡整理整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市南小泉法隆寺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巻五本松廬跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市高沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市岸根町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
 第13集 南小泉遺跡一覧図確認調査報告書一（昭和53年3月）
 第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 第17集 北星城遺跡（昭和54年3月）
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告書1（昭和55年3月）
 第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
 第23集 午報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 第27集 史跡陸奥国分寺昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 半報2（昭和56年3月）
第29集 郡山遺跡Ⅰ—昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集 仙台市南房関係遺跡調査報告2（昭和56年3月）
第32集 湾ノ半島跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集 北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）
第38集 鶴山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）
第39集 燕浜遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集 年報3（昭和57年3月）
第42集 郡山遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査一（昭和57年3月）
第43集 葉遺跡（昭和57年8月）
第44集 湾ノ東道跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集 茂庭—茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第46集 郡山遺跡Ⅲ—昭和57年度発掘調査概要一（昭和58年3月）
第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第48集 史跡見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
第49集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
第52集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
第53集 中出畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集 神明社塚跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集 南小泉遺跡—青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集 南小泉遺跡—倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第61集 山口遺跡Ⅲ—仙台市体育館建設予定地一（昭和59年2月）
第62集 熊沢遺跡（昭和59年3月）
第63集 史跡隠奥開分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）
第64集 郡山遺跡Ⅳ—昭和58年度発掘調査概要一（昭和59年3月）
第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書一（昭和59年3月）
第66集 年報5（昭和59年3月）
第67集 富沢水田遺跡—第1番—一泉崎前地区（昭和59年3月）
第68集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第3次調査報告（昭和59年3月）
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年3月）
第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）
第72集 六反田遺跡Ⅱ（昭和59年3月）
第73集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ（昭和59年3月）
第74集 郡山遺跡Ⅴ—昭和59年度発掘調査概報一（昭和60年3月）
第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ（昭和60年3月）
第76集 仙台城二ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
第77集 山田上ノ台遺跡—昭和59年度発掘調査報告書一（昭和60年3月）
第78集 中出畠中遺跡—第2次発掘調査報告書一（昭和60年3月）
第79集 欠ノ上ノ12遺跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
第80集 南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書一（昭和60年3月）
第81集 南小泉遺跡—第13次発掘調査報告書一（昭和60年3月）
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ（昭和60年3月）
第83集 年報6（昭和60年3月）
第84集 仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ（昭和60年3月）

仙台市文化財調査報告書第82集
昭和59年度
仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV

昭和60年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課
印刷 (株) 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL 63-1166

